



山本やまもと
五十六いそろく

〔第十七話〕

山本五十六元帥げんすいは、明治十八年新潟県長岡に生まれました。父は元長岡藩士高たか野貞吉のさだきち、五十六歳のときの子なのでこの名がついたものです。のち元次席家老もとじせきかろうの山本家を継ぎ、山本五十六となります。

明治維新めいじいしんの際、長岡藩には河井継之助かわいつぐのすけという英傑えいけつがいて、日本人同士で血をながすことの出来ないよう、武装中立ぶそうちゅうりつをはかりますが、攻めてきた官軍の司令官があまりにも無礼で無理解だったため、戦争になってしまいました。長岡の町は焼かれ河井も戦死します。

困窮こんきゅうのどん底にあった長岡に、こういうときこそ将来をになう人材を育てなければならぬと、元藩士小林虎三郎こばやしていろうさぶろうによって学校がつくられました。

ここに学んだ少年の一人が五十六であります。先輩河井継之助・小林虎三郎は、

彼かれの人格形成じんかくけいせいに大きな影響を与えた人物といえます。

海軍軍人となった五十六は、日露戦争にしろせんそうの日本海海戦の大勝利以来、大艦巨砲主義たいかんきょほうしぎ（大きな大砲をそなえた大きな戦艦せんかんを多く持つ）であつた海軍の方針に疑問を抱き、今後の主役は飛行機であると考えました。

大正十四年、霞ヶ浦海軍航空隊副長かすみがうらかいぐんこうくうたいふくちようとなつた五十六は、この先見せんけんの明めいを生かし、パイロットの訓練養成にはげみ、海軍航空隊育ての親となります。

昭和十一年から永野修身ながののおさみ・米内光政よないみつまさ両海相のもとで次官をつとめたあと、十四年八月、連合艦隊司令長官となりました。

十六年九月、日米交渉が悪化し、近衛文麿首相このえふみまろから開戦となつた場合の見通しについてたずねられ、五十六は「海軍は一年半ぐらいあばれてみせます。しかしそのあとは確信が持てません。負けいくさにならないだけの処理をすることが条件になります」と答えました。

対米戦はできるだけ避けること、どうしても戦いになったら、勝っているうち

に講和をはかるよう、政治・外交の力をお願いすると言ったのです。

ハワイ真珠湾攻撃の大成功は、周知のとおりです。宣戦布告前の奇襲となったのは、五十六の責任ではありません。ワシントンの日本大使館の不手際で、通告がおくれてしまい、日本の卑劣なだましうちだと、アメリカ国民を憤激させる結果となりました。くやんでもくやみきれない、大使館員の大失態です。戦争の経過は、五十六の予言どおり、しだいに不利になっていきました。

十八年四月十八日、五十六は最前線の基地を視察中、ブーゲンビル島上空において、搭乗機が米軍機におそわれ、壮烈な戦死をとげます。五十六は軍刀を片手に持ち、席に座ったままの姿勢でとぎれていました。

五十六は、殉職や戦死した部下の名を黒い手帳に書きこみ、いつもその冥福を祈っており、遺族に詫びる言葉をつぶやいている人でした。

「ヤッテミセテ、イッテキカセテ、ヤラセテミテ、ホメテヤラネバ、ヒトハウゴカジ」人は自分の長所を認めてくれる指導者に、喜んでついていきます。部下思

いの五十六は、いつも自分が先頭に立ってヤツテミセ、よくわかるように説明し、さらにヤラセテミテ、ホメテヤル指揮官だったのです。

昭和十八年（一九四三）五十七歳没

○ 長岡藩の河井継之助、小林虎三郎の影響を受けているのだから、山本五十六は凄^{すご}い人物のはずだ。

○ ハワイ真珠湾攻撃は日本大使館の不手際で宣戦布告がおくれたとは……。知らなかったです。

○ 褒^ほめる経営者を目差します。

（M生）